

# 出前講座 報告書

開催日時	令和6年2月15日(木) 午前9時55分 ~ 午前11時35分		
開催場所	伊賀市議会全員協議会室		
申請団体等名称	伊賀市農業委員会		
テーマ	農業農村の課題について		
委員会名等	産業建設常任委員会		
出席議員	赤堀 久実(委員長)、濱瀬 達雄、川上 善幸、宮崎 栄樹、山下 典子、		
	中岡 久徳、増田 雄	記録者	増田 雄

【講座・意見交換等の主な内容・対応等】 (→:出席議員の意見)

- ・伊賀市は7,250haの耕地面積があり、県下でいちばんの広さ。
- ・伊賀米コシヒカリは特Aも取っていて、伊賀は昔から良い米が取れる。
- ・伊賀市内で、地域計画を立てている地域が少ない。
- ・報酬面など農業委員の地位向上を市に要望している。  
→権限に見合った額に。
- ・農業は放っておかれている。悪くなるいっぽうである。  
→集約化が大事と考える。根本的な課題はあるが、プラスアルファを考えて。  
→チャレンジを考えてほしい。
- ・農業はできる所で広くすればというのは、自然環境や生態系がくるうので、中山間地では止めてほしい。  
→有機農法で、中山間地を守っている。  
→良いモデルを作って、若い人に継承していく必要がある。  
→毎週、無農薬の作物を取り寄せている家庭もある。  
→中山間地の里山整備も、後が難儀である。
- ・農地を1か所に集めて大きな会社がやればよいというのは、無借金経営の人の話。  
→そういうことをやりたい人にはそういうことを。うまく組み合わせて。
- ・心の豊かさがなかったら、成り立たない。
- ・せっかくの畑を荒廃地として、太陽光パネルが設置される。  
→子どもにとって、農地など風景も大事。  
→農地は、5~10年でペンペン草が生えた状態になる。担い手がない。

(様式第2号)

→行政の暇な職員は、農業を手伝うなどすれば。

- ・食育は、幼い頃からが大事である。
- ・国はスマート農法をうたっており、大きな会社しか無理である。
  - 機械が壊れたら、百姓を辞めるという声を多く聴く。
- ・「業」は辞めたらよいが、百姓は辞められない。
- ・収入の問題で、農業だけでは生活できない。
- ・制度を頼りに農業をしている。
- ・伊賀はあまりにも単位面積が小さいので、立地条件としてスマート農法などは合わない。
- ・農家が約10ha持っていれば、1億5,000万円くらい必要である。
- ・土質が悪ければ、同じ環境でも作物はできない。
- ・伊賀牛は、過去の5,000頭が2,000頭くらいに減っており、このままでは無くなるのでは。
- ・伊賀牛は、ほとんど地元で消費。
  - 一部は外国にも。東京ではヒレ・ロースの良いところだけ。京都でも美味しいとの意見。
  - 頭数を増やしたら流通は増えるが、つくる人がいない。
- ・中山間地をまず見てもらいたい。大型化・集積化できない。担い手もない。
- ・島ヶ原より玉瀧のほうが良い田だが、跡継ぎがない。
- ・農振地は外せば、産廃や太陽光が来る可能性があり、外せない。
- ・毎年60haほど減っているのは、主に太陽光発電になっている。
- ・遊休農地を作らないように頑張りたい。
- ・国が食糧安保で危機感を持っている。国に振り回されない市の補助を。
  - 農業は国防。伊賀独自の中山間地で多く作っている。伊賀は頑張っている。
- ・まずは、認定農業者など担い手をつくること。
  - 約10a契約で認定農業者の話もあったが、補助のあるうちはよいが、辞めていく。
  - 子どもの農業体験は、教育という観点からも大事。
  - 今後どうあるべきか。人口・消費者が減る中で、現状のまま農地を守るのか減らすのか。
- ・農地を減らす？
  - 自然に返す。
- ・農振地の中にあるかどうかネックになる。農振地に入っていれば作らないといけない。
- ・多種類の野菜を作って売るなど、考える必要がある。

(様式第2号)

- ・議員は評論家であって困る。評論家的な意見が多い。
- ・こうした意見交換の機会を何回でも作ってほしい。

伊賀市議会議長 様

令和6年3月25日

議会出前講座実施要綱第11条第1項の規定により提出します。

産業建設常任委員長 赤堀 久実